

盛岡高等農林学校の創設と玉利喜造初代校長（18）

若尾 紀夫（C昭39・院41）

明治35年3月27日の勅令第98号を以て、盛岡高等農林学校の設置が正式に決定された。一つの疑問がある。なぜ最初の高等農林学校が東北であり、また盛岡であったのか。この疑問に関する具体的な記録はあまり見当たらない。そこで、今回は勅令第98号発令前後の経緯について新しく入手した資料も含めて紹介し、更に盛岡高農の創設と発展に貢献した初代校長玉利喜造教授について述べたい。

勅令第98号発令前：創設前期

東北地方における冷害凶作と飢饉

寒冷地である東北地方（奥羽）は、飢饉と凶作の本場であるといわれ、昔から冷害による深刻な凶作・飢饉に頻繁に見舞われた（5,8）。特に青森・岩手・宮城・福島の太平洋側では冷風（偏東風またはヤマセ）の影響を受けて冷害凶作に悩まされてきた。このような東北における度重なる凶作・農業の衰退・農民の凄惨な状況（飢饉）は、現在の我々にとって想像を絶するものがあるが、遠い過去の出来事ではない（8）。その原因は、回避できない地球規模の気象現象（天災）であるが、同時に当時の農業耕作技法（主に水田耕作技法）や生産性の低い痩せた火山灰土壌の問題（技法・風土）であり、更に封建社会の支配体制や税制などの政治的社会的問題（人災）でもあった（8,12,13）。

東北地方では、江戸時代から明治中期までの300年間に100回、つまり平均3年に一回の冷害があったといわれる（14）。歴史的には、江戸時代の4大飢饉である元禄（1695）・宝暦（1755）・天明（1783）・天保（1832）の飢饉は特に有名である。

明治に入ってから東北地方では、24回の凶作（明治2年、3年、17年、30年、35年、38年、39年、43年など）に襲われたが、とりわけ盛岡高等農林学校の創設期である明治35年と38年には岩手・宮城・福島の太平洋側地域は明治年間を通じて最悪と云われ

る凶作・飢饉に見舞われた。その後、大正時代には4回（大正2年、4年、9年など）の凶作が記録されている。その上、冷害凶作に追い打ちをかけるように、三陸沿岸では度重なる巨大地震と津波により甚大な被害を受け、明治29年に起こった明治三陸大津波では死者・行方不明者が2万人を越え、東日本大震災（平成23年3月11日）に匹敵する惨事であった。昭和に入ってから、昭和6年・7年・9年と大凶作が続き、東北の農山漁村の疲弊は最悪な状況であった（13）。

東北農業の疲弊と振興

このように東北地方は、その風土的特異性から寒冷気象に起因する冷風・低温・陰湿・多雨・霜などや日照（早魃）などにより、しばしば凶作・飢饉に襲われ、農業は衰退し農村は極度に疲弊していた。その結果、東北地方の農業生産性は著しく低下し、農業分野における東西の較差は拡大する一方であった。

時代は江戸から明治に移り、明治新政府は西洋に追いつけ追い越せと様々な制度改革を行ない、急進的な富国強兵策を押し進めた。農業分野での施策は食糧の安定的生産と増産であり、その一環として農業補習学校や農業学校、農事試験場の設置が押し進められ、また農学教育研究の最高学府として東京帝国大学農科大学や札幌農学校が発足した。

明治30年代に入り、政府は東北地方における農業振興・冷害対策を重要な国策として打ち出した。そのためには、農業分野における人材の育成及び東北地方に適した農業の技術的学術的な対策が急務となり、政府はより高度な実業的農業教育機関（高等農林学校）を設置する路線を早くから決めていた（3）。

高等農林学校設置の建議

明治30年頃から帝国議会に大学・高等学校・実業専門学校等の設置について多くの請願がだされた。恐らく、その当時から高等農林学校の設置が発議されたと思われる。因みに明治34年の第15及び第16帝

国議会においては、盛岡高等農林学校の設置（注：この時期には設置場所は盛岡と既決していた）に関する審議が行なわれている（3,6）。

第15帝国議会衆議院予算委員会(明治34年2月1日)：
・今日日本ノ国粹トシテ考エヲ立テテミレバ、高等ノ商業学校アルイハ高等農林学校ナリ、成ルベク実業の高等学校ニ向ツテ進ムコトガ国家ノ為必要デアラウ・・・(文部大臣松田正久)。

第16帝国議会衆議院予算委員会第一分科会（明治34年12月20）：
・中学校ヲ了リソレカラ凡ソ三年位デ卒業シテ世間ニ出テ役ニ立ツ人間ヲ養成スルトイフコトハ、今日ノ急務デアロウトイフコトカラ・・・岩手ニ高等農林学校ヲ興スコトニナツテイマスガ、・岩手農林ハ建築ノ関係上三十六年四月カラ開校シタイト思ツテイマス。・ソウスルト三十六年一月カラ準備ニトリカカリマスカラ、・・・三十五年度ノ予算ニ建築費ヲ、三十六年度ハ経常費ヲソノ都度要求イタシマス・・・(文部大臣菊地大麓)。

第16帝国議会貴族院予算委員会第三分科会（明治34年12月20日）：
・文部省ハ本年度カラ立テルトシテアリマス所ノ学校、即チ岩手ノ高等農林学校、・ソノ開校ヲ急イデオリマス。・岩手ノ農林学校ハ建築ヲ急ギマシタデアリマスガ、何分寒イ所デ冬ハ十分建築ガ出来ナイノデ、来年四月カラ開校スルコトニ致シマシタ。コウナルト明治三十五年度ニ於テ準備トシテ校長ナリ、教員ナリ任命シナケレバナリマセン・・・(国務大臣菊地大麓)。

このように明治30年代になって帝国議会で「高度な農業教育には人材育成が急務である」との方針が示され、「高等農林学校の必要性及び幾つかの具体的な設置案」が審議された。その中で明治34年12月の帝国議会において「盛岡高等農林学校の開校は急いでおり、明治34年度に建てる予定であったが、寒い冬は建築工事ができないので、明治36年4月に開校することとなった。明治35年度は建築予算を要求し、校長及び教員を任命する。明治36年度は経常費を要求する。」と政府の具体的な計画が公示されている。このような背景を以て、勅令第98号（明治35年3月）が発令されたのである。

最初の高等農林学校を設置する場所の選定
当時の社会的経済的情勢から、政府は最初の高等

農林学校を東北地方に設置するとの方針（3）を内定していた。問題は東北のどこに設置するかである。そこで政府はその問題を東京帝国大学農科大学に依頼した。具体的には、明治33年3月13日、東京帝国大学農科大学の玉利喜造教授（農学博士）（鹿児島出身）が「高等農林学校創立設計委員会」の委員長となり、文部省実業学務局長 岡田良平・東京帝国大学農科大学 川瀬善太郎教授（林学博士）・同田中宏教授（獣医学博士）と共に東北の実地調査及び設置場所の選定を行なった（3）。この委員の構成（専門分野）から盛岡高等農林学校は、当初から「農学・林学・獣医学」の3学科としたことが推察できる。農学は特に冷害による凶作（北方寒冷地農業）の問題、林学は東北の広大な森林資源の開発、獣医学は馬産地である岩手の畜産業の発展や獣医師の養成など、農・林・畜産・獣医分野の振興を目的としたものである（7）。

最終的には、高等農林学校を盛岡市に設置するとの結論に達した。では、どのような理由で盛岡が選定されたのか。それを裏付ける調査及び選定に関する資料は残されていないが、以下のような背景が考えられる。

- ・第1高等農林学校設立は、北方寒冷地の農業振興や農業技術の革新を主な目的とした。因みに第2高等農林学校である鹿児島高等農林学校（明治41年3月31日）は南方亜熱帯地域の農業振興を目的とした。奇しくも鹿児島出身の玉利喜造教授は北方及び南方両高等農林学校の初代校長として活躍することになる。
- ・高等農林学校を東北に設置するとの方針ではあるが、福島県や宮城県では南すぎ、青森県では北すぎるので地理的にほぼ中央に位置する岩手県が適当であった。
- ・岩手県が東北農業の平均的な性格を有し、東北振興の拠点として相応しい場所である。東北地方でも、特に岩手県を中心とする太平洋側地域はヤマセによる冷害凶作や早魃などの自然災害で農業の衰退・農村の疲弊が深刻であり、農業振興が急務であった。
- ・交通網整備により盛岡は岩手県の中心都市として発展した。特に、東北本線が明治23年には盛岡まで、翌年には青森まで開通したことによって西南（東京）方面へのアクセスが容易になった。
- ・盛岡近辺には教舎等の施設を始め、実験農場や演習林等に必要の広大な学校用地（盛岡市上田及び岩手郡米内地区）の確保が可能であった。事実、開校後に広大な実験農場・演習林・経済農場の発足が実現した。

- ・農林学校設立に対する岩手県や盛岡市の全面的な支援・住民による積極的な誘致請願（注：別途添付資料と解説）があった。岩手県は学校用地取得に金拾万円の寄附を決議した。

高等農林学校を盛岡に誘致する運動

盛岡市松尾町の表具師晴山家は下張りなどに使うため市役所から「学事雑件」綴りを含む和紙の払い下げを受けていた。その綴りの中に盛岡高農創設に係わる貴重な古文書：上田地区地主有志の誘致請願書（明治32年）・鉈屋町有志の誘致請願書（明治33年）・札幌の入学希望者からの問合せ（明治33年）・それに対する盛岡市の回答（明治33年）が偶然に発見され、農業教育資料館で所蔵（複製）している。その資料等から、盛岡に高等農林学校を誘致しようとする住民の熱心な請願運動を伺い知ることができる。それらの資料は目にする機会は少ないと思われるので、参考までに全文を掲載した（旧漢字は常用漢字とした）。

岩手県議会「農林学校設立を請ふ建議」（明治32年6月26日）（2）

（一）六月臨時会（原文は片仮名）

概要 本臨時会は、六月二十四日開会し、明治三十二年度歳入歳出追加予算、農林学校設置を内務大臣に建議の件及びこの経費として金拾万円を国に寄付の件並びに中学校増設の建議を可決し、六月二十八日に閉会した。

（二）決議事件

農林学校設立を請ふ建議（六月二十六日 可決）

岩手県会議長丹野弥七郎本県会の議決を以て府県制第十七条に因り謹みて建議す案するに我邦の経済は農を以て大本となす国家の財源国民の生産多く之れに資らざるはなし顧みて本邦農事の現況を察するに開墾の事起らず牧畜の業盛ならず殖林蚕桑亦皆改良進歩の著しきを見ず我奥羽地方の如きは殊に然りとなす古来農を以て本となす本邦にして商工業を以て主となすの泰西諸邦に一歩を輪し発達進歩の遅々たるもの抑も何そや蓋し本邦一二の農業高等学校ありと雖も未だ以て農業教育を全国に普及せしむるの設備足らざるに因らすんはあらず豈に照代の一大恨事に非ずや是を以て我県会は我岩手県盛岡市附近に一の関国立農学校を設置し農事及林業教育の発達を計らむと欲し敢て建議を為す所以なり我盛岡の地たるや東北諸県の中央に位し農林教養地として最も其宜しきを得且氣候風土極て学生の生活に適し学校設立地として蓋し間然する所なし政府幸に本県会の微哀を諒せらる、あらは其創設費目中に金拾万円を寄

附せんとす閣下願くは之を裁度し速に本県民の興望を採納せられむことを懇款至誠の至りに堪へず敢て請ふ

明治三十二年六月二十六日

岩手県会議長 丹野弥七郎

内務大臣侯爵 西郷従道殿

農林学校設立費寄附の件（六月二十四日 可決）：

政府に於て盛岡市附近に農林学校を設置せらるゝときは岩手県は金拾万円を国庫に寄附するものとす

上田地区地主有志の誘致請願書（明治32年12月30日）

・末弘知事に提出済 [印章：清岡（盛岡市長）]

・清岡盛岡市長から岩手県知事末弘真方への請願書 農林学校位置の儀に付請願（原文は片仮名）

此頃新聞紙紙上の伝ふる所に依れば政府に於て商業学校、工業学校並農林学校等新設の計画を立てられ其経費の儀は三十三年度追加予算として不日帝国議会へ提出相成候由に有之其事実の如何は素とより我々の承知し得ざる事柄に御座候へ共曩きに岩手県会に於て農林学校に関して決議相成りたる兼も有之若し政府にて盛岡市附近に同校を設置せらるゝ件は岩手県より金拾万円を寄付すへき旨可決相成り其当時県会議長は上京して右の旨を其筋へ上申したる趣伝聞致居り且つ又其筋にても農林学校設置の曉には其位置を岩手県と内定致され居候哉に聞及ひ候に付政府に於て愈々農林学校の経費を三十三年度追加予算として提出せられ帝国議会の協賛を経候上は必ず其位置は盛岡市附近に決定せられ候事と想像罷在候然るに盛岡市附近の場所は孰れの地を以て適當とせらるゝやは其筋の御明察も有之候事と存候へ共我々は上田方面に農林学校設置の相応なるを認め茲に請願書を呈上し其位置を上田方面に確定せられんことを希望仕候 尤も同校敷地は幾何の面積を要せらるゝやは承知せざる次第に御座候へ共農業林業に関する学校のことなれば定めて広大なる面積を必要とせらるゝへく且つ又人家稠密の場所を避くるものとするも盛岡市街を距ること余り遠隔ならざる土地を選定せらるゝ儀と存候加ふるに学生を置かるゝには土地乾燥にして空気飲料水の善良なる地を選択せらるゝことと存候我上田方面は幸にして水田畑地十数万坪の面積連続し人家稠密の雑踏なきも盛岡市街に接近して諸事の便利を有し土地高燥にして空気飲料水とも清潔に有之四望快潤して風景佳景絶北には岩鷲の高峰を望み西には北上の清流を控へ候に付学校を設置し学生を養成するの場所としては最も適當の土地なると確信仕候殊に我上田方面は曩きに国道を廃止せられ其他県の事業及市の事業に就きても別に

御計画相成りたる事も無之年々衰微に傾くの事情も御座候に付ては盛岡市全般の景況を維持する上に就きて是非共農林学校の位置を我上田方面上台に定められ候様御取計の程偏に奉懇願候随て農林学校御設立の節は幾何の土地を要せられ候とも上田方面に於て間に合ひ候ことなれば好し数万坪の多きにても相当の代価を以て御買上に応ずる事に致し申度即ち田は壹反歩に付平均百五十拾円以内畑は壹反歩に付平均四拾円以内の代金を以て御需に応し度と存候右は素より農林業の発達上必要な学校を当地方に設置せらるる政府の御趣旨を奉し公共の爲めには進て其御計画を補ひ度我々一同の精神にも有之前記の価格を以て土地買収に承諾可致候間何卒我々の精神を諒察せられ愈々農林学校設置の件は上田方面上台に其位置を確定せられ候様御取計の程幾重にも奉願上候謹言

追而本書に記名調印したる者の外に土地関係の者多数有之候得共右は不日記名調印の上に書面差出可申本件は至急を要する事情も有之候に付不取敢此段我々より願上候也

明治三十二年十二月

岩手県盛岡市上田小路：大森 尹、上田組町：大村勇次郎、米内村字上田：雪ノ浦恣之助（他2名）、盛岡市上田組丁：名久井弥七（他10名）、四ツ家町：金田一勝定、上田：遠藤邦蔵・池野末治郎（他29名）、合計48名

岩手県知事末弘直方殿

注）官選第4代岩手県知事：明治31年7月～明治33年4月

鉦屋町有志の誘致請願書（明治33年1月）

請願書 岩手県盛岡市鉦屋町（原文は片仮名）

某等灰かに承はるに政府我県内に農林学校を新設するに意ありて其敷地を盛岡市附近に求めんとすと果して道路の言の如んば某等其附近なる中野村を以て之に應せんとするものなり中野村大字東中野小学高崩及之れに接続する一帯の地は気候温和土地高燥に地味膏腴水質清冷北上川築川の二川前後に詳流し又堤下諸所に冷泉湧出し飲料に充つべく衛生上頗むる適當の地とす故を以て廣大なる学校を設けるに於て完全せりと云うべし且市街を離る事若干以て校舎を建つべく以て農園を設くべしまた山野を其附近に求むる事難らずとす今農林学校敷地を盛岡市附近に求めば之れに優るものなしと断言せるも蓋し臆言に非るべし旧藩政の時日新堂（下注）なる洋医学の校堂を此地に創設したるもの抑も故なしとなさず当時日新堂の講堂に掲けたる額面に頼復氏行文せるもの能く此地の人方を育する校地に適せる文学を排列

せり其額の文に曰く

堂在千府城之東南廿五六丁之一邱岡隣八幡林背築川而臨北上川鑪山在其東岩鷲山在其北其江山幽邃之境可接図而知レ矢實幽僻宜於育方之地也入此堂者願宜不背此名也 慶応二年四月 頼復

堂ハ府城ノ東南廿五六丁ノ一邱岡ニ在リ隣ハ八幡林背ニ築川而シテ北上川ヲ臨ム鑪山ハ其ノ東岩鷲山ハ其北ニ在リ其レ江山幽邃ノ境ニ接図ス可シ知レ矢實ニ幽僻宜ク育方ノ地ナル宜シ也此ノ堂ニ入ル者願イ宜ク背カザル宜此レ名ナリ 慶応二年四月 頼復（以上筆者注）

某等政府今回の施設を聞くに及んで雀躍此等の地所を以て敷地に薦めんとす 是れ某等此地市に關係あるの故を以てしか云はんや適當なる敷地を以て之に應じ以て政府の厚意に副はしめんとする微意に出つる豈他あらんや若し夫れ其地値に至りては当路の意見もあるべく至当の価格を以て應じべきは某等地主及有志者の断言する所なり

右某等地主及有志者共に意志陳述仕候間御審査の上御採用相成候様其節へ可然御開申被成丁度此段奉請願候也

明治三十三年一月

有志者 岩手県盛岡市鉦屋町百二十三番戸村井源三 外百六十四名

注）日新堂は、西洋医学や西洋科学技術等を教授・研究する南部藩の洋学校で、幕末の文久3年（1863）、東中野新山館（注：盛岡から宮古へ向かう閉伊街道の城下口、現南大橋高崩付近）に開設された。現在、



写真1 日新堂遺跡の石碑
（現盛岡市高崩：岩手県医師会建立）

遺跡には石碑(岩手県医師会)が建てられている(写真1)。この地に盛岡高等農林学校が設置されたとすると盛岡の情景は現在とは大分違ったものになったであろう。

札幌の入学希望者からの問合せ(明治33年10月29日)

・盛岡市受付：第四二七三(明治33年10月31日)

札幌在住者(高田烈夫：札幌区北七条西二丁目八番地)からの手紙：世間の噂や新聞紙上などで高等農林学校が盛岡に設置(明治三十四年度)されること更に帝国議会でも設置が承認された旨を知ったが、遠隔地で様子が分からないので学校設置の有無及び募集要項(学科や入学資格等)について知らせたい旨、盛岡市に問合せた。(注：入学者名簿を調べたが高田烈夫の名前は見当たらない)

札幌の入学希望者の問合せに関する回答(明治33年11月2日)

・盛岡市決議：第四二七三号(明治33年11月2日)

・盛岡市役所内回議文書(取扱：荒川則一)

・盛岡市長[清岡]の印章

前記手紙に対する盛岡市の回答：生徒募集や入学試験に関することなどは未公示で確かではないが、校舎の建築は三十四年度より着手し三十五年度には落成、三十六年春には生徒募集の予定である。学科は農科・山林科・獣医科で入学資格は尋常中学校卒業以上である。(注：この回答には盛岡市長[清岡]の印章がみられる)

盛岡高等農林学校用地買収と創立設計・校舎新営準備についての報告書(地図添付)(明治34年6月26日)

恭啓時下御健勝慶賀之至に奉存候陳者文部省直轄高等農林学校設置の件に付是迄種々御配慮を煩したる次第も有之候処同校の儀は愈々当盛岡市附近に設置の事に確定相成り其敷地となるへき市内上田及岩手郡米内村上台下台に係る土地凡九万坪買収の儀に就ては昨年来其手続を履行し今般悉皆登記済となりたるもの即ち別紙畧図の通に有之而して其創立設計に関しては高等農林学校創立設計委員たる岡田実業学務局長玉利農学博士川瀬林学博士田中獣医学博士の四氏に於て夫々調査中に可有之又其の校舎の新営に関しては去五月中旬より文部省建築課盛岡出張所を上田十五番戸に開設せられ小国技手其他の諸氏出張目下実地に就き設計中に之に付不日建築工事に着手可相成尤も右工事の儀は三ヶ年継続を以て完成の予定なる由に承り候随て同校開設の暁に於ては農林業の改良進歩を謀り国家の富源を拓く上に於て東北地方の受くへき利益実に鮮少なからざる儀と欣喜罷

在候処右は畢竟各位の御高配に基くこと、深く奉感謝候依て段々御挨拶を兼ね其後の景況御報道申上度如斯に御座候勿々敬具

明治三十四年六月二十六日

盛岡市役所 清岡 等

資料からみた盛岡高等農林学校設置の経緯

岩手県は高等農林学校が盛岡に設置されるときは金拾万円を国庫に寄附することを決議したが、その日付(明治32年6月)からみて、高農設置案はかなり早い段階で内定していたと推察される。

それを受けて、盛岡の上田地区地主有志及び鉾屋町有志が誘致請願書をほぼ同時期(明治32年12月及び明治33年1月)に提出している。上田有志は盛岡市上田及び岩手郡米内村上台下台(注：現在地)、鉾屋町有志は中野村大字東中野小字高崩付近(注：閉伊街道の城下口で築川が北上川に合流する地域、現在の東安庭・東中野・高崩・神子田付近)を高農用地として最適であるとそれぞれ推薦し、両者で誘致競争が行なわれた。

盛岡市(清岡市長)は、最終的に盛岡高農の敷地として上田・米内村の土地(90,848坪)を確定し、岩手県寄附金10万円で文部省が買い上げた(明治34年2月5日)。その判断には、上田地区は市街地(盛岡駅)に近いという利便性や広大な敷地の確保などが考慮されたものと思われる。

ところが農林学校として必須である多量の農業用水の確保が緊急な問題(注：当時、近隣の高松池は水量や水利権の関係で利用できなかった)となり、北上川の取水(上流の小野松部落付近)と校用地(上田)までの水路(延長約10 km)の大工事が行なわれたが、関連する記録は殆どない(7,10)。この水路については、現在調査(文献・写真・古地図・現地)が進められている。

前記した第16回帝国議会(明治34年12月)の議事録「盛岡高等農林学校の開校は急いでおり、明治34年度に建てる予定であったが・・・」も、盛岡高等農林学校の設置計画を具体的に裏付けるものである。

掲載した公文書には「盛岡市長 清岡 等」の名前及び印章が記されている。清岡 等(文久3年12月8日～大正12年8月10日：61歳没)は陸奥国盛岡(現盛岡市東中野)で生まれ、明治6年盛岡中学校入学、明治9年父親に伴われ秋田に寄留、明治13年太平洋学校(旧制秋田中学校)を首席で卒業。明治15年から明治27年まで岩手県庁に勤務し、明治27年3月27日から明治34年10月28日まで盛岡市長(2代)を務めた。その後、岩手日報の主筆、同社長、盛岡電気株式会社社長(現東北電力)などを歴任した(4)。清岡市

長は、在任中に高等農林学校の盛岡への誘致請願に携わり、上田地区への高農誘致に貢献したことから、盛岡高農の歴史上記録されるべき人物である。

勅令98号発令前後：創設前後

盛岡高等農林学校の敷地

北の奥州（旧陸羽）街道関門である上田組町（上



写真2 杭打ちした建築敷地から北方面「八幡山・毛無森山（高松神社）・高松池」を望む（明治34年秋）



写真3 杭打ちした建築敷地から西南方面を望む（明治34年秋）：背後に家屋や樹林、視察中の人物が見られる。

田同心町)には足軽同心屋敷がつくられ、上田から梨木町(高源寺坂)に至る周辺には上田三小路「上田小路(門前町)・上田与力小路・上田新小路」と呼ばれる武家屋敷があった(7)。

上田新小路の全部と与力小路の一部(北側)、及び米内村上台下台が盛岡高等農林学校用地(国有地)として買い上げられたが、現在でも農学部附属植物園には当時の武家屋敷にあった山辺の松(山辺家屋敷跡のヒメコマツ)、目時のヒバ(目時家屋敷跡のサワラ)、柿や栗などの樹木、古井戸(石川啄木の妻堀合節子の生家跡)、上田新小路跡が残存している。盛岡高農用地の大部分は米内村の荒涼とした原野で城下の辺鄙の地であったが、創立後に生徒等の手で開墾され水田・畑地・牧草地・桑畑・果樹園・運動場・テニスコートなどに整備・拡充された。

盛岡高等農林学校施設の整備

教舎等の新営に関しては、明治34年5月中旬より文部省建築課盛岡出張所が上田に開設され、国から派遣された小国技手らが設計及び建築工事に着手。工事(注:請け負った建設会社は不明)は明治34年10月1日より始まり、明治36年9月22日を以て主要部分は竣工した。

盛岡高等農林学校の教舎等を工事している貴重な映像(明治34~35年)が残されている。北方面「八幡山・毛無森山(高松神社)・高松池」(写真2)及び西南方面(写真3)を望む杭打ちの敷地、第1教舎・第2教舎・倉庫(土蔵)・講堂(後の第2講堂)・



写真4 写真3の左前2人目無帽の人物:後の玉利喜造初代校長

寄宿舍(後の自啓寮)などの建築中の様子(写真5)がみられる。何れも撮影者は誘致請願書連名者の一人である池野末次郎(請願書では末治郎)である。写真3の左前2人目無帽の人物(写真4)は、後の玉利喜造初代校長で、恐らく着工の時(明治34年秋)視察に来たものと推察される。

与力小路に面した正門(現農学部通用門)脇には門番所(後に現旧正門に移築・現存)がみられる。正門を入ると東西に建てられた第1教舎(農学教室)がある。その建物は本館も兼ね校長室・事務室・図書室・食堂・教室・植物動物教官室・実験室があった。その北側に第2教舎(化学教室)、第3教舎(林学教室)、第4教舎(獣医学教室)が並んでいる。

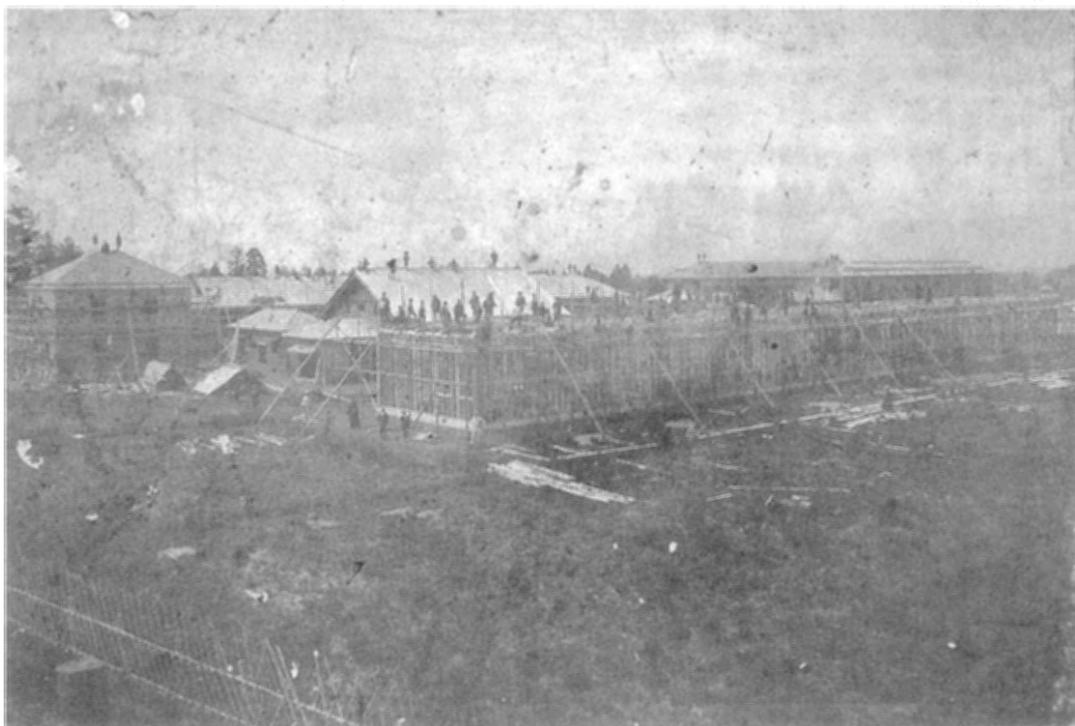


写真5 建築中の様子:第1教舎・第2教舎・倉庫・講堂・寄宿舍2棟(明治35年夏)



写真6 創設当時の盛岡高農の鳥瞰図：岩手山を望む上田の地に建てられた教舎等の全景

第1教舎と第2教舎の間には講堂、その他に家畜病院・寄宿舎2棟・農場事務室・養蚕室・畜舎・官舎2棟がある（写真6）。

勅令98号発令後：盛岡高農の始動

盛岡高等農林学校の設置が正式に決定（勅令第98号）する前後までの経緯を述べてきたが、次にその後の動向・体制の整備について摘記する。

盛岡高農の始動：初代校長と学則等

明治36年1月15日、最初の人事として東京帝国大学農科大学の農学博士玉利喜造教授が初代校長に任命され、その直後（1月16日）に文部省内に創立仮事務所が設置されて校務が開始。明治36年2月3日には全16項目の学則が制定された（3）。

- ・本校ハ農業、林業及獣医ニ必要ナル高等ノ教育ヲ施ス所トス
 - ・本校ノ学科ハ農学科、林学科及獣医学科トス
 - ・本校ノ修業年限ハ三箇年トス
 - ・本校ニ於テハ本科生ノ外ニ研究生及選科生ヲ置クコトアルベシ
- （以下省略）

明治36年4月15日に、東京の仮事務所が盛岡の本校内に移され、入学試験（4月）、入学式と講義の開始（5月1日）、農林獣を象徴する3色校旗の制定式（6月13日）、御聖影奉戴式（6月14日）、校友会発足（9月21日）、家畜病院開院（10月12日）が

続く。この年には教授陣の人事も始まり、盛岡高等農林学校が活発に胎動し始めた年であった。

教授陣の赴任

玉利喜造教授は、既に述べたように高等農林学校設置の選定責任者として盛岡に設置を決定した「盛岡高農の生みの親」であったが、同時に初代校長としてその基礎を築いた「盛岡高農の育ての親」でもあった。

開校当初は、農学・林学・獣医学の専門分野の教授陣「玉利喜造（初代校長）、佐藤義長（2代校長）、稲垣乙丙、今井吉平、石丸文雄、可児岩吉、大森順造、山田玄太郎、小出房吉」で構成され、その後も吉村清尚、中村 鼎、鈴木梅太郎、関 豊太郎、上村勝爾（4代校長）、村松舜祐、柘植六郎等の優秀な教授が赴任し、東京帝国大学農科大学につぐ偉容を誇っていた。

入学式と開校式

明治36年4月、第1回の入学試験が行なわれ、明治36年5月1日には志願者236人（農学科101人・林学科85人・獣医学科50人）から選抜された入学者84人（農学科30人・林学科30人・獣医学科24人）を迎えて最初の入学式が挙行され講義が開始。ここに盛岡高等農林学校の歴史が名実共に始まることになる。

開校式は明治36年5月に授業開始と同時に予定であったが、前年は東北地方、特に岩手県が大凶作であったため開校式は見送られた。明治37

年には日露戦争勃発のため挙式は延期され、結局3学年が揃った明治38年5月28日に開校式と祝賀行事が盛岡市をあげて盛大に行なわれた(3,11)。皮肉なことに開校式の年も、明治35年の凶作を上回る明治期最悪の冷害凶作に襲われた(15)。翌明治39年4月26日(学年は明治41年から4月1日～3月31日となる)には、記念すべき第1回の得業証書授与式(入学者84人・得業生63人:得業率75%)が行なわれた。その年も冷害凶作であった。

玉利喜造初代校長と盛岡高等農林学校

玉利喜造初代校長と盛岡高等農林学校とは、創設の前後から切っても切れない関係にあった。玉利喜造教授の履歴や功績については、次回以降詳細に紹介するので、ここでは予報程度の記載に留める。

玉利喜造教授は疲弊した東北農業の振興に早くから関心を持ち、農学者及び社会学者として活躍し、多くの著作を発表している。後に紹介する「東北振興策一大和民族の寒国に於ける発展策(明治37年)」においては、寒国東北における様々な問題点や施策を詳細に論じている(1)。

玉利喜造教授は盛岡高等農林学校の創設目的から考えて初代校長として最適任者であった。その教育者としての根底には、多くの先見的研究業績(我国の農学博士第1号)は勿論、「玉利校長は風貌、挙動ともに乃木将軍を彷彿させるものがあつた」といわれたように古武士のような人格があつた(3,9)。

玉利喜造教授は、厳格な教育方針のもとで徳義を重視した生徒指導を行なった。例えば、教授自ら倫理の講義を担当し他の教授達にも分担させ、禁酒禁煙をうたい、長髪を禁じ、冷水浴を奨励、女性との交際を戒めた。その反面、洋食会を催して生徒に洋食マナーを学ばせることもあつた。

明治42年5月8日、在職7年で郷里の鹿兒島高等農林学校初代校長に任命され、「一声を杜に残して杜鵑(ほととぎす)」の一句を残して盛岡を去った。この句(一声)には玉利初代校長(杜鵑)が盛岡(杜)で過ごした「盛岡高農創始者としてのこころざし・生きざま」が込められている。

玉利喜造教授の貢献は、盛岡高等農林学校創設の一つの目標である「北方寒冷地である東北地方における冷害凶作の克服」と「寒冷地に適した農業法の開発」を緊急課題として取り上げ全校体制で調査研究に当たったことである。その玉利教授の冷害凶作克服と東北農業振興に対する情熱や想いは、関豊太郎教授(明治38年)、そして宮澤賢治(大正4年)へと時代を越えて受け継がれることになる。これについては次回以降紹介する。

本会報第132号(頁11～13)では、柳昌子著「賢治先生誕生:秋田風土文学 第9号」を参考にさせて頂きました。ここに改めて著者に感謝申し上げます。資料の入手でお世話になりました石川専務理事に謝意を表します。

参考資料

- 1) 「東北振興策:大和民族の寒国に於ける発展策」:農学博士玉利喜造述、全国農事会、編集者(大島國三郎)(明治37年9月3日)
- 2) 農林学校設立を請ふ建議:岩手県議会史 第2巻(昭和36年9月)
- 3) 回顧六十年:岩手大学農学部(昭和37年5月1日)
- 4) 清岡家の人々:清岡博見、大典堂印刷所(昭和40年3月20日)
- 5) お天気日本史:荒川秀俊、文芸春秋(昭和45年7月25日)
- 6) 玉利喜造先生伝:玉利喜造先生伝記編纂事業会(昭和49年3月31日)
- 7) もりおか物語(5) —上田かいわい—:盛岡の歴史を語る会、熊谷印刷(昭和51年2月20日)
- 8) 飢餓日本史:中島陽一郎、雄山閣(昭和51年6月25日)
- 9) 農芸化学科の歩み:大矢富二郎先生退官記念事業会(昭和54年7月7日)
- 10) 盛岡高等農林学校写真帳 熱きポランのひろば:岩手大学農学部資料収集委員会、杜稜印刷(昭和54年1月1日)
- 11) 岩手大学農学部七十五年史:作道好男・作道克彦、教育文化出版(昭和54年7月10日)
- 12) 宮澤賢治と盛岡高等農林学校断片(一) —玉利校長と関豊太郎教授の冷害研究をめぐって(上)—:亀井茂、早池峰12(昭和60年12月)
- 13) 昭和東北大凶作:山下文男、無明舎(平成13年1月20日)
- 14) ヤマセと冷害—東北稲作のあゆみ:ト蔵建治、成山堂書店(平成16年4月8日)
- 15) 冷害はなぜ繰り返し起きるのか?:ト蔵建治、農文協(平成17年3月31日)